

# 恋人たちの時刻

寺久保友哉



新潮社版

久保友哉  
人たちの時刻



こいびと  
恋人たちの時刻<sup>じこく</sup>

昭和五十四年八月三十日 印刷  
昭和五十四年九月五日 発行

著者 寺久保 友哉<sup>ともや</sup>

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務部 〇三六〇五一一 振替東京四一八〇八  
編集室 〇三六〇五四一一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社植木製本

定価 九八〇円

© Tomoya Terakubo. Printed in Japan, 1979  
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

恋人たちの時刻／目次

翳の女……………5

爪痕……………121

白い部屋……………189

あとがき……………220

装画・檀田伸也

# 恋人たちの時刻



翳  
の  
女



ニセアカシアの花の香が嘔氣を催させる。舗道を歩きながら、洗浴は胸の締めつけられるような思いがした。彼は初めてこの街を訪れた旅行者のように、予期しない何ものかとの出会いを求めて歩いてきた。長い冬の間、彼はひとりだった。街を出歩くこともあまりなかった。冬の厳しい寒さに比べれば、ひとりでいることの苦痛は軽いものにおもえたためかもしれない。土埃を含んだ季節風が吹き荒れる短い春が過ぎ、街の木々が緑に彩られると、ひとりぼっちという思いに耐えられなくなって、彼は外へでかけた。彼は渴いていた。それが肉体的なものなのか、精神的なものなのか、彼にも分からなかった。その渴きを鎮めてくれる誰かに会いたかった。

友だちがいなかった訳ではない。月曜日から土曜日まで出席しなければならぬ医学部の講義もある。彼を悩ますのは退屈ではない。似てはいても退屈ではない。空腹感や喉の渇きと同じ肉体的な苦痛にむしろ近い。

彼は今日、大学の仲間に誘われたドライブを断わっていた。その理由を自分の中にはっきりとみつけることはできなかった。なんとなく行きたくなかった。ドライブに行くかわりに、ひ

とりで街にでた。歩き疲れると喫茶店で脚を休めた。

夕方、彼はひとりで下宿しているアパートに帰った。喫茶店から喫茶店へ、渡り歩いたような日曜日だった。胸の中の空白は一向に満たされていなかった。彼は今日ほど、自分が欠陥のある人間におもえたことはなかった。

長い間、口を開けたままでいたので、洗治は顎がだるかった。

小さなレントゲンの機械をもってきた歯科医は、撮る位置をさぐりながら、

「もう解剖は、済みましたか」とくぐもった声で訊いた。歯科医は顔半分をおおうぐらい大きなマスクをかけていた。

「まだ、講義だけです」

「動かず、そのまま」

歯科医は写真を二枚撮った。それから現像するために暗室に入っていた。

洗治が、ビルの四階にあるこの歯科医院の名前を知ったのは、地下鉄の駅にでている広告からだ。美人のモデルを使った眼鏡店の広告の横に、この歯科医院の広告があった。大学の講義に出る朝、彼は眼鏡店の広告と向い合ったホームで、電車を待つ。停った電車のこの位置の扉から乗ると、降りたとき出口の階段にいちばん近い。それに眼鏡店のモデルの写真も気に入っていた。ホームに電車が入ってくるまで、彼は、眼鏡をかけたモデルの写真から、眼鏡をとりはずしたときの顔を想像したり、それ以上の行為に及んだときのことを気ままに考えたりしていた。隣りの広告に眼を走らせることはあったが、最後まで広告の文字を読んだのは、第三大臼歯が痛みだしてからだった。

治療を受けるには、午後五時から午後九時三十分までという診療時間が、彼には都合よかった。

第三大臼歯などといわずに、親不知歯といえば、歯科医は医学生ですかなどと訊き返したりはしなかっただろう。つまらぬことをいつてしまった、と洗治はおもった。

診察室の右手の窓に、向いのビルのパラという赤いネオンの文字が点滅している。パラの次の文字は、窓枠に遮られて見えなかった。次につづくスペルがCOであることが、彼には分かっていて。パラのネオンの点滅するビルは八階建だった。洋装店や本屋、美容室やレストランが雑居する、どちらかといえば若者向きの店が多いビルだった。ポスターには赤い下着をつけた黒人の女を使っていた。コクトーの詩からでもヒントを得たのだろうか。パラの南向きの壁面には、老人斑を浮かべた首相の似顔絵と、死んで間もないロックンロール歌手の似顔絵とが描かれていた。洗治がそれを見たのは一週間前のことだ。まだ消されてはいないだろう。その歌手の歌は好きだったが、顔つきは好きになれなかった。新聞の調査では、首相の支持率は就任当時より五〇パーセント落ちていた。ロック歌手の顔より、首相のその方が洗治にはまだ好感がもてた。世間では、首相より死んだロック歌手の方に人気があった。壁面に二人の似顔絵を描いた画家は、首相より歌手の方に好意を持っていたらしい。首相は実際より醜男に、歌手はその反対に描かれていたのだから。歌手は突然に死んだのだが、遺体が解剖されたという話はきかなかった。屍体を墓から盗みだそうとした男たちが、捕まったという記事が新聞に載っていた。屍体は真白な舞台衣装を着て、埋葬されていたという。捕まった男たちは屍体ではなく、装身具を盗むことが目的だったのだろう。歌手の死因は急性心臓麻痺だった。麻薬によるかもしれないという噂もあった。殺されていたならば、解剖されたにちがいない。死んだ当時、歌手の体重は一〇〇キロを越えていたという。解剖したら脂肪の厚みで梃摺るこ

とになっただろう。壁面に描かれていた歌手はスマートだった。最近でた雑誌のグラビアに、朝食に蕎麦をすすっている首相の写真があった。その写真の首相より、壁面の首相は痩せていた。なぜ肥らせてみなかったのだろう。首相の頭は大きくない。歴代の首相の中でいちばん小さいかもしれない。脳の重量は、一三六七グラムちょうどではないだろうかという気がする。その重量は、日本人の男の脳の平均値だった。冨治はその数値を、今日の解剖学の講義で知ったばかりなのだ。首相夫人の脳の重量は、一二一四グラム。それは日本人の女の脳の重量の平均値だった。黒い髪で、才根頭の歌手の方は、二〇〇〇グラムに近い脳の重さがありそうだった。成熟胎児の脳重量は、男四〇〇グラム、女三七〇グラム。冨治は教わったばかりの知識を、頭の中で反芻した。

歯科医は暗室からまだ戻らない。

P A Rのネオンと重なって、窓ガラスに白衣姿の女が映った。冨治は視線を転じた。

若い女がみえた。彼女はここの助手の一人らしかった。あるいは先程までマスクをかけていたので、冨治はみすごしていたのか。歯の痛みばかりに気をとられていたせいなのか。

眼元と顎のあたりに幼さが残っている。すらりとした体つきだ。彼女のまわりには、若草のような雰囲気漂っている。

椅子にのせた頭の位置を少しだけ替えた。冨治にみられていることを、彼女の方ではまだ気づかない。歯科医が戻ってくるまでの間に、なんとか彼女と話ができないものだろうか。

彼女が動くと、冨治の眼の前の、器具を入れた皿が邪魔になった。皿の陰から、先端にやすりをつけたドリルが伸びた装置の陰に、彼女は歩いた。皿も、ドリルをつけた装置もすべて、冨治の腰かけている椅子の附属物だった。

彼女にこちらへ来てもらうためには、用事を頼むしかなかった。咄嗟にそれが、彼にはおも

い浮ばない。奥歯の痛みは、忘れたように消えている。

彼は首から膝までおおわれた前掛の下で、手を伸ばした。前掛は、治療器具をのせた皿の下で、テントのようになった。軽く弾ね上げると、ピンセットや充填用の器具が、にぎやかな音をたてて、リノリューム張りの床に散乱した。

彼女は吃驚したように、床をみた。それから小走りにやってきた。

「すいません」と洗治は、後に傾斜した椅子から身をおこしながらいった。

彼女は、片膝を立てる恰好で、床に散らばった器具を拾い集めていた。

「すいません」

洗治は、回転式になった皿を押しやりながらもう一度いった。

「いいんです」と彼女は下を向いたままであんなに。すがすがしい声だった。頬にかかった髪が柔かく揺らいた。

洗治の心臓が、小刻みに早く動きだした。

こんな娘と友だちになれたらなあ、と彼はおもった。

「ほんとうは、歯はなんともないんです」

洗治は、このような嘘がすらすらでる自分が不思議におもえた。

器具を拾う彼女の手が止まった。頬にかかった髪をかきあげて、彼をみた。訝るような眼だった。素早く彼は、彼女の胸にある村上というネーム・プレートを読みとった。

「なんともない歯を抜かれそうなんです。助けてください」

呆れたというように、こちらをみた彼女の眼が和んだ。

「帰りに、外で待ってます」

眼をそらせた彼女の頬のあたりに、緊張した表情が浮んだ。

洗治は、彼女の返事を待たずに、上向きの背凭れに寄りかかった。白い天井に、残像となつて彼女の横顔が掠めた。村上なんという名前なんだろう、と彼はおもつた。

穴を空けられた親不知歯に、銀を充填されて、洗治は歯科医院をでた。

彼女が歯科医院の玄関から出てくるまで、一時間半近く待たされた。

現われた彼女は、紺のジョーゼットのギャザー・スカートに、乾いた砂のような白い麻のブレザーを着ていた。ランニング・シャツ風に、大きく胸をくつた赤い縞のTシャツが、洗治には眩しかった。診察室にいたときより、痩せてみえた。

洗治をみて、彼女は顔を赤らめたが、眼には警戒するような硬さがあつた。

並んで舗道を歩きながら、洗治がいった。

「とても素敵な喫茶店があるんだ」

彼女は、それには答えなかった。

「それとも、呑みにいこうか」と洗治がまたいった。

「困ります」と彼女は控目な声で答えた。

「踊りにいこうか」

彼女は返事をしない。

「君のために、奥歯に穴を空けられた男が、これまで何人ぐらいいるだろう。ぼくは、君のためなら、この歯に全部穴を空けられてもいいぐらいいんだ」

外燈に照らされた彼女の横顔は端正だった。

「第三大臼歯に、ぼくが穴を空けられ、砂よりまずい銀を詰められたのは、現実のことなんだ。その間ずっと、苦痛を我慢しながら、君のことだけ考えていた。穴を空けたのは、ぼくにとつ

ては、あの先生じゃない。君さ。しかも終った訳じゃない。この奥歯に詰め込まれた銀のあるうち、ぼくは君を考えつづけることになるんだ」

四つ角の歩行者用の信号が赤に変わった。

「婚約指環のように、これはそう簡単に取りはずす訳にはいかない。君のところの先生、力が強いな、顎がはずれるところだった、銀を詰め込むとき」

彼女がかすかに笑ったようにもみえた。

「穴を空けられたときのドリルの音。あの痛み。これから、君をおもいだすとき、一緒にそれをおもいだすことになる。歯だけじゃなしに、ここにも穴を空けられたみたいだ」

洗治は喋りすぎて、哀しい気持になった。彼は自分の話すことばが、本心からでているようなおもいがしてきた。気まぐれであった筈の彼の気持は、おかしいほど真剣なものに変わっていた。

信号が青になった。

「会わなければよかったかな」

彼女は何かを話そうとしたが、そのまま口を噤んでしまった。

「村上なんていうの、君の名前」

「……マリ子です」

「用事でもあるの、今夜」

「ええ」

「無理をいって、ごめん」

彼女の歩調がゆるんだ。

「誘ってくださって、ありがとう」といった。優しい、大きな眼をしていた。

彼女はふたたび、早足で歩きはじめた。彼は彼女を追いかけてなかった。乾いた砂に似た色のブレザーを着た彼女の後姿は、ほっそりとしていた。後から抱きしめたいような、華奢な肩だった。

一時間半も待たされたせいで、よけい彼女を好きになったのかもしれない、と彼はおもった。そのような経験が、これまで彼にはなかった。歯科医院の治療用の椅子で、長いこと開けっ放しにしていたときのように、口の中が乾いていた。

去っていく女を引きとめる方法は、哀願ではなく力だろう、と洗治はおもった。しかし、そのどちらも、女を引きとめつづける効果は期待できそうになかった。

くよくよしたってはじまらんさ、と彼は自分にいった。そして、ポケットからタバコの箱をだし、一本抜いてくわえた。火を点けたマッチの箱には、彼女を待っていたときに入った喫茶店の名前が読めた。捨てようかとおもったが、もう一度ポケットに仕舞った。

ビルとビルの間に、歓楽街のネオンがみえた。そこには、金で買える女たちがいた。いま彼は、金で買えないものが欲しかった。

詩がかけそうだと、と彼はおもった。体の細胞のひとつひとつから、放電するような気配を感じとれた。この気配が、凝縮して寂しさの固体になってくれたらなあ、と彼はおもった。顔を上に向け、タバコの煙を深く吸い込んだ。すると彼は、やっと村上マリ子から自分をとり戻せたような気分になった。

外燈の照らしだした舗道のどこにも、白いブレザーに紺のスカートの彼女の姿はみえなかった。